第256回

荒川の人

ACC30th ANNIVERSARY ACC30周年記念

荒川区にゆかりのある人にスポットを当てた『荒川の人』。これまで『荒川の人』で荒川の街にまつわるエピソードを披露してくださった方々は30年で総勢252名にものぼります。節目となる30周年を記念し、過去に登場した“あの人”にアンコール。

荒川の街で過ごした夫の両親との忘れられない日々 認知症の母への想いを手紙と日記に託して。

アーティスト **城戸真亜子**さん

【プロフィール】1961年愛知県生まれ。武蔵野美術大学油絵学科卒業。81年女流画家協会展、98年VOCA展入選。86年よりほぼ毎年個展を開催。サンパール荒川の絵画「少女」、東京湾アクアラインPAの壁画、京都木津学研都市などのパブリックアートを手がけるほか、テレビ・CM出演、アートプロデュース、執筆、講演など幅広く活動。著書に『ほんわか介護』（集英社）、『記憶をつなぐラブレター 母と私の介護絵日記』（朝日出版社）など。

多方面でマルチに活躍中の城戸真亜子さん。近年は認知症を発症したお母さんの介護でも注目を集めました。「母の介護にはたくさんの気づきがありました」と、城戸さんは言います。ひとつ屋根の下で暮らした日々を振り返っていただきながら、ほのぼのとした絵とともにお母さんに語りかけるように綴った手紙や日記についても、じっくりとお話をうかがいました。

忘れゆく母の記憶をつなぐため 綴り続けた手紙と日記

お母さんが認知症を発症したのは今から15年ほど前、80歳の頃。当初はお父さんが世話をしていたものの、肝臓がんを患ったこともあり、荒川区内に引っ越してくることになりました。2年ほどは「息子夫婦に迷惑がかかる」と近所にマンションを借りて暮らしていましたが、症状が進行するにつれ「老老介護」による問題も浮き彫りになっていったそうです。

もともとはお華とお茶の師範で、他人に迷惑をかけることをなによりも嫌う人だったというお母さん。城戸さんはそんなお母さんに記憶が失われても心に届くよう、日々の出来事や尊敬の気持ちを手紙や絵日記に綴ることを思いつきます。枕元やテーブルの上などお母さんの目に留まりやすい場所にそっと置かれた手紙や絵日記は、段ボール箱が一杯になるまでの量になりました。

昨年11月、お母さんは家族に見守られながら天国へ旅立たれました。95歳でした。

お母さんへの接し方について今でも後悔にさいなまれることがあるそうです。「何度も同じことを言い聞かせる場面で、つい説明をごまかしてしまうことがありました。孤独を感じている母に対して丁寧さに欠けてしまったことが心残りですね」

それでも、わからないことだらけではじまった介護は城戸さんにとってたくさんの気づきがありました。「母に手を差し伸べているうちに、私も幼い頃に周囲から見守られてきたことに気づかされましたね。『老いて、死んでいくこと』を母が身をもって教えてくれたような気がします」

そして今、介護や看病など同じ立場にある人たちに城戸さんから伝えておきたいこととは。「核家族化も進んでいますし、近所付き合いが面倒だと思う人もいるかと思います。それでも、些細な会話で気持ちが紛れることがありましたから、どうか一人で抱え込まないでほしいですね。地域ぐるみで認知症の方に寄り添いながら、認知症の方の人権や個性を生かしていける社会になることを願っています」

普段から着物を着る機会が多かったお母さんの影響もあり、着付け教室に通うようになったと近況も明かしてくれました。

楽しげにたたずむパブリックアート「リバーハープコートの仲間たち」を制作

南千住駅の東側、汐入地区には城戸さんが手がけたパブリックアートが設置されているのをご存じでしょうか。水と音楽と音の妖精をモチーフにデザインされたカラフルでポップな10体のオブジェ「リバーハープコートの仲間たち」は、近隣にお住まいの方や道行く人たちの心を和ませています。

また、ほぼ毎年開催しているという個展では常に新作にこだわり、忙しいスケジュールの合間を縫って自宅近くのアトリエでキャンバスに向かいます。「母の介護をしていた頃は少し作品数が減ったこともありましたが、年間に大小合わせて40点ぐらいの作品を制作しています」

かれこれ10年以上、関西方面で子どもたちを対象に開催しているアートスクールも城戸さんにとっての大切なライフワーク。既成概念にとらわれることなく、のびのびと楽しみながら作品を生み出す彼ら、彼女たちの感性には、いつも驚かされるばかりだそうです。

日常に人情が満ちあふれた大好きな街に これからも貢献していきたい

荒川区観光大使を務め、区内で講演会なども行っている城戸さん。ジョイフル三ノ輪周辺、都電沿いで住宅が肩を寄せるようにして立ち並ぶ路地裏の風景をはじめて見た時は感動すら覚えたそうです。荒川区に移り住んで、もうすぐ30年。住み慣れたこの街の魅力はなんといっても地域の人のあたたかさにあると言います。「お店の場所を尋ねると、親身になって教えてくださるだけでなく、そのお店からの帰り道に顔を合わせると『ちゃんと見つけられたかい?』と、声をかけてくださることも少なくありません。面倒見のよさや何気ない優しさがあふれていて、本当に住み心地のいい街だと思います」

それ以外にも荒川区が都内でも犯罪の少ない区であることも安心して住み続けられる要因のひとつに挙げてくれました。

ご両親もすぐそばを隅田川が流れる荒川の街の風景を喜んでくれたそうです。「生前の父は毎日のように区の施設のカラオケ教室に通っていました。車椅子を押しながら母と満開の桜並木の下をお散歩したこともいい思い出ですね」

荒川区でお気に入りのお店をうかがったところ、町屋の焼き鳥「一番鳥」さん、南千住の千住間道にあるお蕎麦屋「大黒屋」さん、笑顔のご夫婦がカウンターに立つ旬懐石「よし川」さんをピックアップしてくれました。たくさんの思い出に彩られた街は、これからもアーティスト・城戸真亜子さんに素敵なインスピレーションを与え続けていくことでしょう。

前回の登場は今からさかのぼること26年前、平成4年。城戸さんが荒川区に住み始めてまだ間もない頃でした。

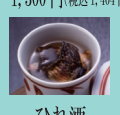
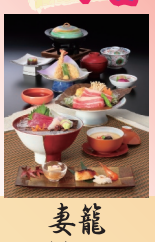
この世界逃れあたわざるもの
ひとつは 死（肉体と魂） ひとつは 税金（徴収と使途）
みんなで考えよう人間の命と税金!!

嘘でもいいから「ありがとう」と言おう
税理士／行政書士／再生コーディネーター
伊坂会計総合事務所
荒川区南千住5-9-6／ホームページ：http://isaka-office.biz/
／Eメール：isaka_office@yahoo.co.jp
TEL 03-3802-1418(代) 職人税理士34年 伊坂かつやす

しゃぶしゃぶ・日本料理 木曽路
～木曽路のとらふぐ～
期間：3月31日（日）まで

てっさ
大皿盛り（3～4人前） 3,500円（税込3,780円）
ハーフ（1～2人前） 2,000円（税込2160円）

ふぐ唐揚げ 1,300円（税込1,404円）

焼きふぐ 1,800円（税込1,944円）

ひれ酒 800円（税込864円）
お昼の集い
※写真はイメージです。
期間：11月15日（木）～12月28日（金）まで

妻籠 2,000円（税込2,160円）

集い膳 3,000円（税込3,240円）

忘年会ご宴会ご予約承ります。
※無料送迎バスご用意いたします。※ご予算ご相談ください。

木曽路南千住店
荒川区南千住 5-6-15
電話：03-5850-5567
グラスドリンク人数分プレゼント
●2,160円以上の料理をご注文に限ります。
●グラスドリンクを人数分プレゼントいたします。
●他券との併用はできません。
●ご飲食前に係員にお渡しください。
●H30年12月31日まで有効
●木曽路南千住店のみ有効